

『談話資料 日常生活のことば』

(現代日本語研究会 遠藤織枝・小林美恵子・
佐竹久仁子・高橋美奈子編 ひつじ書房 2016年)

野田 尚史

1. 本書の意義

本書は、現代日本語研究会編集の『女性のことば・職場編』(ひつじ書房1997)と『男性のことば・職場編』(ひつじ書房2002)の続編に当たるものである。自然談話を文字化したデータがCD-ROMに収められており、そのデータを使って談話を分析した論文が書籍に掲載されている。前の2著『女性のことば・職場編』と『男性のことば・職場編』は職場のことばを対象にしていたが、本書は日常生活のことばを対象にしている。

本書のもっとも大きな意義は、自然談話データの公開である。この公開によって、雑談を中心に録音された17時間38分の文字化された談話データがだれにでも使えるようになった。このようなデータは、現在のところ、他にはない。今後、プライバシーに対する意識がますます高まる可能性が高いことを考えると、このデータは非常に貴重であり、「人類の宝」だと言える。

また、本書にはこのデータを使って執筆された論文13編が掲載されているが、これらの論文は自然談話データの活用例になっていて、貴重である。

2. 談話資料の特徴

本書のCD-ROMに収められた談話データの大きな特徴は、次の(1)から(4)だと考えられる。

- (1) 雑談を中心に録音された談話データである。
- (2) 談話研究にとって必要なデータ量が確保されている。
- (3) 場面や発話者の情報が詳しく示されている。
- (4) 丁寧な文字化が行われている。

このうち、(1)は談話の種類のことである。職場のことばを対象にした前

2 著と違い、本書は親しい人どうしの雑談を中心にしている。雑談は、筒井 (2012) や村田・井出編 (2016) に見られるように、最近、研究が盛んになってきているテーマであり、本書はその流れを推進するものになる。

(2) のデータ量については、次のようになっている。本書のデータ量は、『女性のことば・職場編』と『男性のことば・職場編』を合わせたデータに比べ、収録時間はやや短いものの、レコード数、つまり発話文の数では上回っている。欲を言えば切りがないが、個人では到底、録音して文字化できないデータ量であり、談話研究には十分なものと言える。発話者も、40代をピークに10代から90代まで幅広い年代にわたっている。

(3) の場面や発話者の情報については、次のようになっている。場面については、談話参加者数のほか、「自宅」「職場」「外出先」といった「場所」、「出張から帰宅して自宅で妻と雑談」「経営する居酒屋で友人と雑談」「友人宅で恋愛相談」といった「場面」の情報が示されている。録音を依頼した「協力者」については、年代や性別、職業・地位、現住地、現住年数、言語形成期の居住地の情報が示されている。「協力者」以外の発話者については、年代、性別のほか、協力者との関係、協力者との年代の上下、協力者との親疎についての情報が示されている。言語の構造ではなく言語の運用を研究する場合はこのような詳しい情報は必須であり、有益である。

(4) の文字化については、次のようになっている。文字化は、1つの音声データに対して最低でも4人以上の共同研究者が確認・修正作業を行ったということである。音声が公開されていないため、文字化されたデータだけから文字化の精度を検証することはできないが、『女性のことば・職場編』、『男性のことば・職場編』より丁寧に文字化が行われている印象を受ける。

たとえば、短いあいづちや発話の重なり、「ふ、富士山は、ちゅ、中国の人たちは」のような発話の「つかえ」も、前2著以上に正確に文字化されているようである。また、「ちっちゃい (=小さい)」、「あ、作ったの? ↑【驚いたように】」のような注記が網羅的に多数入っていて、有益である。表記も、前2著より統一されているようで、語句を検索するのに便利である。

3. 掲載論文の特徴

本書には、本書のデータを使って執筆された論文13編が掲載されている。それらをそれぞれの論文の特徴によって整理すると、次のようになる。

本書は、『女性のことば・職場編』、『男性のことば・職場編』と似たデータの収集を行っている。(5)と(6)は、それらのデータとの比較を行っている。

(5) 「日常生活」における自称詞—特徴と使い分け— (小林美恵子)

(6) 女性文末形式の使用の現在—『女性のことば・職場編』調査と比較して— (増田祥子)

本書のデータは、雑談を中心に録音された談話データである。(7)から(9)はそれを生かし、語彙や文法ではなく、談話に特有の現象を追究している。(7)は、ジェンダーという視点から考察している点にも特徴がある。

(7) 直接話法におけるジェンダー表現と役割語—翻訳されたセリフという視点から— (佐々木恵理)

(8) 普通体を基調とした自然談話にあらわれる丁寧体—笑いが起こる場面に着目して— (高宮優実)

(9) 自然談話にみられる重なるの諸相—親しい関係の日常談話から— (本田明子)

本書のデータは、大量の話しことばデータである。(10)と(11)はそれを生かし、文法現象の中で話しことばで重要だと考えられるものを扱っている。

(10) 自然談話における「ようだ」「みたいだ」—非断定表現・婉曲表現を中心として— (中島悦子)

(11) 自然談話における「そうそう」の機能 (牧野由紀子)

本書のデータは、高齢化社会に対応して発話者として高齢者を積極的に対象にしている。(12)は、高齢者のことばを取り上げている。

(12) 高齢者の外来語 (遠藤織枝)

本書のデータは、場面や発話者の情報が詳しく示されている。(13)と(14)は、場面や発話者どうしの関係を重視して分析を行っている。

(13) 日常談話にみられる敬語使用の実態 (佐竹久仁子)

(14) 家族の談話にみられる行為要求表現の現在 (高橋美奈子)

言語の変化は、書きことばより話しことば、それも日常会話のようなインフォーマルなものから先に進行する。(15) から (17) は、日常会話のデータだということを生かし、最近の言語変化を捉えようとしている。

(15) 日常会話における形容詞「すごい」の程度強調用法 (孫琦)

(16) 日常談話にみる確認表現「ジャナイ」「ジャン」の実相 (谷部弘子)

(17) 「半クエスチョン??」の諸相—20年後の考察— (斎藤理香)

本書掲載の論文はデータの整理と同時進行で執筆されたということもあり、十分な分析が行われていないものもある。それは、これからこのデータを使ってさらに深い研究をする余地がたくさん残っているということである。

また、本書の論文は、語句の検索から出発しているものが多い。しかし、この資料を読んでいき、該当の言語現象を見つけるような研究もある。私は、野田 (2007) で (18) のような破格文を研究するとき、前 2 著に非常に世話になった。本書のデータも、検索から出発しない研究にも役に立つ。

(18) 10B : で、ゴルフの賞品に一、会社でやるコンペに、ホールインワンしたら、[店名 1] のハンバーガーを 1 年間とかね。

(『男性のことば・職場編』「自然談話データ CD-ROM」4132)

4. 今後の展開に向けての要望

膨大な時間と労力をかけて『女性のことば・職場編』、『男性のことば・職場編』、『談話資料 日常生活のことば』のデータを作成・公開するという偉業を成し遂げた現代日本語研究会である。ここで、普通なら無理だろうと考えられる難しい要望を 3 つあげておきたい。

1 つめの要望は、一部だけでも音声を開示してほしいということである。音声を開示するには、新たに音声公開の承諾を得なければならない。音声は文字化されたデータに比べ、格段に個人が特定されやすいので、承諾を得るのは難しい場合が多いだろう。ただ、一部だけでも音声が開示されれば、さらにこのデータの有用性が高まる。

私は、ポリー・ザトラウスキー『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラ

テジーの考察―』（くろしお出版1993）で収集された音声の一部を個人的に聞かせてもらったことがある。そのとき、文字化されたデータからは想像もつかない発音やリズム、イントネーションに衝撃を覚えた記憶がある。自分が住んでいる地域以外の人たちの音声は、文字からは想像しにくい。

2つめの要望は、CD-ROMに収められているデータをネット上に公開してほしいということである。特に海外に住んでいる人にとっては、本書を購入するのは難しい。すぐに公開するのは無理だろうが、将来的にはだれでもが無償でこのデータを使えるようにしてほしい。その前に、『女性のことば・職場編』と『男性のことば・職場編』のデータを公開していただけるとありがたい。その公開のためには、国立国語研究所も協力を惜しまないだろう。

3つめの要望は、本書に続く次の談話資料の作成・公開を検討してほしいということである。それができるノウハウや組織力を持っている機関やグループはほとんどない。ぜひ後継者を育て、次の計画を具体化していただきたい。できれば、次は首都圏以外の人たちの「日常生活のことば」を取り上げてほしい。「日常生活のことば」は方言差が非常に大きいからである。首都圏の次は、話者だけでなく研究者の数も多い関西だろうか。

難しい要望を並べたが、それは、本書の出版で今後の談話研究の発展が確実なものになり、夢が大きく広がって、さらに欲が出てきたからである。

本書の表紙の色やデザインは、地味だった前2著より格段に明るく、明るい未来を暗示しているようである。今後の展開に大いに期待している。

参考文献

- 筒井佐代（2012）『雑談の構造分析』くろしお出版
- 野田尚史（2007）「時間の経過から生まれる破格文」串田秀也・定延利之・伝康晴編『時間の中の文と発話』（シリーズ文と発話3）pp. 1-33 ひつじ書房
- 村田和代・井出里咲子編（2016）『雑談の美学—言語研究からの再考—』ひつじ書房

（のだ ひさし・国立国語研究所）